第八章　現 役 時 代

第1節　秩父市立秩父第二中学校教諭に任ぜられる

1. 着任までと初年度

着　任

親友小高秀一君の近くで一緒に教師になろうとして、上福岡中学校に内定した。報告に秩父帰った。その晩の父は「うんうん」と聞いていたばかりであったが、翌日の9時頃母校の秩父市立秩父第二中学校の校長小林重俊先生から電話があった。すぐに学校に来いという。行ってみと「お前は、ここの学校の教師になるのだ」という。もう「上福岡中学校に内定してます」というと「そっちは電話で断れ」と言われた。夜になって、父に話すと、父が小林校長先生に頼んだのだという。姉達は二人ともお見合いで、優秀な警察官に嫁いでいた。兄は浦和市立大原中学校の美術教師だ。弟は東京学芸大学書道科の3年生で、秩父の家は両親だけで寂しかったのである。3年後に父が埼玉大学の書道の教員になって、秩父高校に弟が後任として着任するまでの3年間、私は秩父市立秩父第二中学校教員として勤めた。

小林重俊校長はよく飲んだ。月に一度位のペースで全職員で、木造校舎の2階にある家庭科教室で宴会を開いた。だるまストーブにアルミ製のでかいケトルに、酒の銘柄など一切構わずに2～3本の日本酒を無造作につぎ込んで、茶飲み茶碗で飲む。味は銘柄が混じっているので、苦いだけが、みんな酔った。酒のつまみは落花生、みかん、煎餅程度で大したものはない。徹底的に酔わされた。

新　居

私が埼玉大学を卒業して秩父に帰った頃、両親はまだ野坂の家に住んでいた。父は上町に土地を100坪程度購入して新築するという。私が設計を任された。何回くらい書きかえさせられたろうか。それでも、父の希望通りに設計して新しい家ができた。それまでの我が家は、宮地、中村、野坂とも借家であった。新築した家は、野坂の家の無駄を省いた設計であった。間口一間半の南玄関、玄関を入ると八畳の洋間がある。左の北側が六畳洋間と十畳和室。右が六畳の居間と台所がある。トイレと風呂場は八畳洋間の奥についている。今迄住んでいた借家と違って、上質の造りになっていた。

秩父第二中学校中庭にて

仕事＝遊び

母校の第二中学校の3年間は張り合いがあった。私の教師生活の青春時代である。生徒は優秀な子が多く、私も張り切っていた。1年目教頭先生が「夏休み中、私が一日も休まずに学校に来ていた」と大声で他の先生方に話した。私は夏休み中に毎日学校に行くべきだというような、自覚を持ってやっていたわけではない自分自身の中学校時代にそうしていたように、毎日学校に行って、吹奏楽部、合唱部、テニス部の子供達を相手にして、部活動をしながら遊んで いたのである。夏休み中に私と毎日テニスをした男子のペアは、県大会に出場し、優勝した東松山中学校のペアには敗れたが、3位になった。

専門科目

1年目、持ち時間は28時間、すべて音楽の授業だった。午前3時間、午後3時間という日もあった。高音域が一層出せなくなった。当時の日本はまだ正しい発声法は知られていなかった。だから正しい発声法を私が知るわけがない。私が正しい発声法・呼吸法を身につけたのは、教師なって15年くらい経ってからである。ピアノは上手だった。第二中学校が合唱コンクールに出場して、指揮は福島先生で、ピアノ伴奏は私が担当して、県で2位に入っ

た。福島先生は1位になれなかったことをとても悔しがった。福島先生からベートーベンのブロンズ像を、誕生日のプレゼントとしていただいた。私の部屋にいまも飾ってある。私が最初の年に担任した生徒達は、私が頼りなかったようある。伝達事項の正確な伝え方も会得していなかったし、生徒の掌握の仕方も分からなかった。私の中学2年の担任だった新井満作先生が、私の隣のクラスの受持だった。また私が中学3年当時の担任、山口先生が教務主任だった。小林校長先生が結婚されたときの仲人が、私の父だった。姉たちの同級生がたくさん勤めていた。私は廊下を歩いていても、生徒達と同じように頭を下げっぱなしであった。

左から福島、宮前、浅見先生

2．2年目

コンクール

福島先生が転勤された。合唱コンクールは私が指揮し、音楽部の生徒達を全員引き連れて出場した。他の学校に移られた福島先生が練習を見に来られ「去年県2位だったのは、部活動の生徒を出場させるのではなくて、声のよい生徒を選出して、小菅さんが伴奏したからよ」。音楽部の生徒達のコーラスで、生徒の伴奏では、到底上位には入れないとおっしゃられた。その通りになった。私は正しい発声法を知らないから、部活動の生徒達の声を鍛え上げることができなかったし、生徒のピアノ伴奏は、頭が良くてお上手でも、才能ある生徒だったわけではない。その辺の事情と、コンクールのレベルの厳しさを、私はまったく理解していなかった。生徒達には公平に接したかったのだ。コンクールに入賞するために、特別に選んだ生徒達で出場し、部活動の生徒をないがしろにすることは、私にはできなかった。このような公平公正の精神は、教師生活を通じて最後まで変わらなかった。吹奏楽部の正顧問の滝沢先生も、私の考え方に同感してくださった。

二年目の合唱コンクール

吹奏楽

吹奏楽の正顧問は滝沢先生。滝沢先生は社会科の先生だった。私が吹吹奏楽のことを何も知

らないにもかかわらず、私に指揮を任された。私も喜んで部活動の練習指導や指揮をした。秩父公園の産業館で行う吹奏楽コンサート、秩父神社の神楽殿でも吹奏楽コンサートを開いた。県の吹奏楽コンクールにも出場した。私の指揮では入賞できなかった。それでも滝沢先生は何もおっしゃらずに、一緒に吹奏楽部を指導した。作曲を終生の仕事と決めていた私は、何故吹奏楽を指導するのか自分に問い、管楽器、打楽器を知ることで、後の作曲活動に役に立つだろうと自分で納得した。吹奏楽は指導者が吹奏楽を知らなければ良い演奏はできない。吹奏楽の演奏に指導者の力量と音楽性がはっきりと出る。

秩父公園における吹奏楽部の行進

この点から見ると秩父市立第二学校時代の私の指揮は、吹奏楽に関しては、まったくの無知に等しかった。滝沢先生が、よく私に指揮を任されていたと感じている。将来の私に期待をかけられていたのかも知れない。滝沢先生の薦めで行進曲「青空の下に」を作曲した。中学生にもできるように、音域やテクニックに配慮し、かつ4/4拍子でなく2/2拍子になっている。

秩父第二中学校にいた3年間が、後の私の教職生活のすべてを凝結している。秩父二中体育 館で行われた吹奏楽祭で、大宮桜木中、大宮工業高校の演奏を聴いた。当時の埼玉県吹連理事長秋山先生や春日部高校の杉山先生が秩父に泊まられて酒宴が行われた。秩父吹奏楽連盟の理事長平山さん、滝沢先生をはじめ数名と私が出席した。その時に女生徒が何名かずつ、吹奏楽に入り始めたことが話題にった。秋山先生曰く「女生徒が吹奏楽を経験することは非常に素晴らしい。それはフルートを持ってお嫁に行き、その子供が吹奏楽の道を志すことが素晴らしいから」。吹奏楽部員の殆どが生徒である今、女性が結婚しなくなり少子化が進んだ今、今昔の思いひとしおである。

3．3年目

転　勤

私が高校教員試験に合格して、埼玉県立杉戸農業高校に転勤するとき、滝沢先生は「小菅君のためを思えば高校教師になる方がよいことは分かっている。けれど俺は淋しくつらい」ともらさた。歓送迎会の夜に二次会で深夜まで飲んで、私は秩父線に乗り込んだ。酔って眠り込んでしまって、熊谷に着いても目が覚めなかった。そのまま秩父に逆戻りして、家に帰って一泊した。翌日杉戸に帰った。滝沢先生と私はよく飲んだ。滝沢先生は浴びるほど飲んで、二日酔い、三日酔いされる方だが、歓送迎会二次会に滝沢先生の姿はなかった。秩父市立秩父第二中学校を転勤する前の校長先生は斎藤政二先生であった。斎藤政二校長先生の兄上は、斎藤正一先生とおっしゃる洋画家で、日本美術展覧会で入選されるほど有名な画家であった。私の勤めた頃の秩父市立第二中学の美術教師の浅見嘉正先生ともに日展作家である。写真家で父の知人でもある清水武甲先生も日本で有名な方である。父が秩父商業学校という男子校で教鞭をとっていた頃の教え子達が門下生となって、日展書道家をたくさん輩出した。秩父という土地柄は、知性と弁の立つ人達がたくさんいた。山国であるが人材は豊富であった。

高等学校の教員試験を受けて、音楽は73人受けて3人合格し、その年に高校教員になれたのは私一人であった。3年間のノルマを果たした私は、埼玉県立杉戸農業高校の音楽教師として、10年間勤めることになる。

秩父を離れて杉戸町に来たときに、秩父市立秩父第二中学校で最後に担任していた1年4組女子達と3月に羊山公園に遊んだ。離任式で壇上に私が上がったとき、担任していた女の

子の一人が列から走って離れて泣き出した。「こんなことは初めてだ」と理科の先生がユーモラスに話されたこと。歓送迎会の後、二次会を「設楽」という保護者がやっているスナックに行って、羽生経由で杉戸に帰れる終電車に乗ったが、気がついたらそのまま秩父駅に帰って、翌日の始発電車で杉戸農業高校に帰ったことが思い出されてきた。

4．秩父第二中学校時代の作品

この三年間に作曲したものは、いずれも機能和でつくられたものばかりである。日本の響きを求る作風は、杉戸農業高校に赴任してからになる。行進曲「青空の下に」を初め、以下の作品がある。あかしやのブルース(1963.12.4)、誕生日の歌(1964.2.21)、風の描いた絵(1964.10.15)、NAOKOうた(1964.11)、ワルツを踊ろう(1965.1.18)、半分だけ(1965.2.17)、わらしと風とやっこ凧(1965.3.1)、宝登羅のブルース(1966.1.1)。これらの作品は、みな滝沢先生の交友関係の中から生まれた歌曲である。「あかしや」は平山さんという方が経営する喫茶店の名前、「風の描いた絵」と「NAOKOのうた」は高田先生というお医者さんの詩、「ワルツを踊ろう」と「半分だけ」は平山さんの詩である。大学時代に土肥泰先生から学んだ作曲法で作られたものである。

―着任当時の私－長瀞にて－

5．手記抜粋－着任当時の私－

昭和38(1963)年10月8日

音楽とは実に素晴らしいものである。あの限りない芸術性。求めても求めても止むことのないあの無限性。その魅力に僕は惹かれる。この一年、第二中学に就職したことは、決して無駄でなかった。第一に吹奏楽、これは僕に管弦楽の理論を教えてくれた。それから指揮の重要性と編成の大切さを…。コーラスは、発声法の重要さを、身をもって体験したことと同時に、曲想の重要性、次にテンポとリズムの重要さである。速いテンポの曲をゆっくり演奏し、ゆっくりのテンポの曲早く演奏するということは、何と難しいことだろか!

教授するということは、実に有益なことである。それは、その人間は逆に生徒に教わっているのである。従わせることは、逆に自分が従うことである。例えば指揮は実に重要である。指揮はその音楽に無限の力を与えている。指揮が素晴らしければ、音楽は芸術的極限に達することすら可能である。しかし不完全な指揮は、あくまでも不完全な音楽しか再現しない。ピアノ音楽がピアノ技巧が未熟なら、その音楽も未熟なように。それを僕は指揮棒を持ったことにより、身をって体験したのである。

新任の教師と中学生。それは、限りない理想を実現させようとつとめる。また、不可能なものを可能ならしめる一つの存在であろう。実際の社会とは、およそ縁遠い存在であろう。

兄嫁の死　昭和38(1963)年12月30日

人間である以上必ず死というものがやってくることは誰でも同意するところである。しかしそれが現実に、自分の身のまわりの者が今、この世を去ろうとする事実に直面したとき、この世に一体これほど惨いことがあってよいのだろうかと考えざるを得ない。今日という日は、朝から晩まで兄嫁の病と死のことで僕の頭は一杯であり、心はうちしおれていた。

朝5時、野坂の家のおばさんが、兄嫁の手術を知らせてきて、父母は即刻8時21分の上り出かけていった。10時に兄の手紙が入れ替わりに届く。強度の貧血と胃潰瘍で入院と記されいた。11時59分「京子危篤」の電報…。弟と私はしばらく話がとぎれた。弟も何らかの気持で兄嫁を哀れんでいたに違いない。私は今はまだ死にはしないにしても、義姉の死が頭にこびつき、その先入的なことについて瞑想に耽りがちなことに気づき、虫の知らせに違いないが、惜しく思われて仕方がなかった。夜10時半、母が帰る。義姉は胃癌、二ヶ月もたないとのこと。生まれたばかりの赤ん坊が可哀想だ。兄は一体どうやって、この児を育てる?

義父はどんなに悲しむだろう。私の気持ちも何かとめいってくる。

昭和39(1964)年 9 月4日

僕の生き甲斐は何か。今の僕の生き甲斐というものは、最小限度に言ってピアノを弾くことにある。ピアノを弾いていると、心の憂さは一切晴れ、上手く弾けると純粋のよろこびに浸れる。真の音楽に浸れるのだ。それがいまの僕の生き甲斐だ。しかし希望はそこにあるのではない。僕の希望、それは作曲にあるのだ。そのための研究を少しずつ続けている。この希望は、いつかきっとやってみせる。近い将来、きっと実現させてみせる。

昭和40(1965) 年5月10日

私の一家は教育界に生きている。同時に自己の研究を持ち、それぞれの道を極めようと芸術の一分野で研究しているのである。そのような境遇で過ごしてきた私は、芸術というものについて、ささやかではあるが、ある種の考えを持つようになった。それを芸術雑感として一筆述べてみたい。内容は至極高慢で苦言に聞こえる。しかし、これは私への苦言でもある。また、若い頃の私の、世間を知らない若輩の言う台詞くらいに考えて頂きたい。最近私の目に入る芸術には、私の心にピンとくるものが、非常に少なくなった。一般的傾向としてテクニックばかり追い、芸術家の傾向として、他の芸術全般を鑑賞し、味わい、感銘する人は非常に少ない。また感銘を与える作品も少ない事があげられる。日本の映画はもちろん、世界的な映画の傾向として、内容のとぼしいものとなっている。今日の芸術家の一般的な傾向として、テクニックばかり重視ずる向きがる。「感情的に走ることなく知的な美しさ」のあるものが芸術でなければならない。

人間は弱い動物である。人間が地球を征服できたのは何故か。それは、やはり考えることができたからではないだろうか。現代人の傾向としての刺激のみに走り、考えることを忘れたならば、先人の生み出した真の芸術より一層の発展はなくなる。

芸術家となる一つの使命として、一般大衆への鑑賞への芽を広げることがあげられる。鑑賞者のない芸術はありえない。もしあるとしたら、そのような芸術は、価値の極めて薄いのであると思う。同時に、自分なりに一歩一歩自己の向上努めなければならない。

昭和 40 年度　担任の 1 年 4 組
羊山公園にあそぶ

1年4組の諸君へひとこと
昭和41(1966)年 2 月9日

君達は実に気性が激しい。おそらくこの学校で一番デリートで気迫に満ちたクラスだろう。でも反面、とても素直な面をもっている。その点は先生は大好きだ。先生の今の気持ちは、君達あっての毎日だといってもいいくらいだ。君達のことを考えながら一日が始まり、また、君達のことを考えながら床に入る。君達が先生の言う通りにならないと実に淋しい。また、先生の言うことを聴いてれたときは有頂天になり、こんな素敵な生徒を持った僕は、本当に幸せだと思う。先生はそん毎日を送っている。

今日ここに筆をとったのは、ひとつお願いがあるからだ。お願いというより、先生から君達の批評と言って良いだろう。それは、自分の欲望のままに動いてはいけないと言うことだ。それは、友達を人格者として見なくてはいけないということだ。常に自分の教養と人格向上をめざすことだ。この三つがまったくない。行き当たりばったりの人間は、世の中に出てもそれだけの事しかできない。自分の欲望を抑える人間こそ、一人前になったといえる。衝動に駆られて、欲するままに動くような人は、人間ではない。考えることは人間だけに与えられた一つの能力なのだと常に考え、そして行動しなさい。そこに人間としての人格が磨かれていくのだ。

1966年 3月 1日

雨よ、私の心の心痛を洗い流してくれ。世のしじまを破り、大地にうち付ける豪雨よ。素

っ裸で飛び出し、珠玉に身を洗いたい。雨よ、心の沈痛を洗い流してくれ。
　故郷を離れていく。私の心はどうしてこうも重くなるのか。仕事をしても責任を感じ、張りがない。また、次の仕事を引き受けることのできない悩み。先に望みのある仕事も、区切りをつけることになるやるせなさ。私の心は閑散としてくる。次の希望、それは今の私には考えられない。秩父に生き、住んでいる人間よ。なんて幸福な生活をおくっていることか。この山々の連なりは互いに助け合い、励まして日々をおくっている、そこに住む人々の象徴である。武甲山の姿、それは今後の秩父の発展と勇姿を内容で現している。私のこれから行くところは、果てしない地平線と空とが結びつきそうな、閑散とした街。ちょうど私の今の気持ちにピッタリしている。故郷を離れていく私の今の気持ちを現している。
　いったい何の当てがあろう。何が自分のためになるのだろう。何故行かなければならないのだろう。私はそれで悩んでいる。秩父の人達よ。かんべんしてくれ。私は自分をもっと磨きたい。自分で自分の道を開きたい。一己の人間として、自分の一生の試練として、私は故郷との絆を絶ちたい。今は見逃してくれ。世間が自分を一人前の人間として認めてくれるまで、他人の飯をわせてくれ。